地域の公園環境と子どもの外遊び

―小学生以下の子どもの外遊び空間の実態―

研究開発室　北村 安樹子

―要旨―

① 小学生以下の子どもをもつ母親へのアンケート調査によると、地域（歩いていける範囲、小学校区内）に「子どもが自由に、のびのび遊べる公園」、「公園以外で子どもが自由に遊べる屋外空間」が少ないと答えた人は、それぞれ63.7%、84.8%を占めた。

② 子どもがふだん、外では遊ばないと答えた割合は、子どもが自由に遊べる公園や、公園以外の屋外空間が少ない「クローズ型」地域に住む母親で高い傾向にある。

③ 子どもがふだん、外で遊ぶ場所は「公園」（80.6%）が最も多く、「自宅の庭等」（60.6%）、「知人・親族宅の庭等」（33.2%）がこれに続く。「クローズ型」地域のうち、大都市では「公園」（90.3%）をあげる割合が突出して高く、「自宅の庭等」（46.2%）、「教育・ケア施設周辺」（44.1%）がこれに続くのに対し、小都市では「自宅の庭等」（67.4%）が「公園」（64.4%）を上回っている。

④ 「クローズ型」地域に住む母親では、子どもの遊び場に関する情報の入手先として「親同士の口コミを通じて」（62.6%）をあげる人が最も多く、「市町村の広報誌を通じて」（53.0%）、「実際に周辺を歩いたり、外出中・移動中にみつけて」（49.1%）がこれに続いた。若い母親ほど親同士の口コミや保育園・幼稚園・学校などの教育・ケア施設、インターネットや子育てサークル等を通じて情報を得ている割合が高い。

⑤ 直近１か月における母親の地理情報の活用状況をみると、紙媒体の地図については年齢が高い母親ほど利用経験が多く、パソコンやカーナビ、携帯電話などを通じた地理情報については、若い母親ほど利用経験が多い傾向がある。

1. はじめに

都市開発の進展や地域社会の変化にともなって、わが国の子どもの遊びを取り巻く環境は大きく変容している。宅地開発等によって、かつては子どもの遊び場であった空き地や自然空間が減少する一方で、新たに子どもの遊び場となってきた公園も、禁止事項等や事故・犯罪に対する親の不安感の高まり等によって、必ずしも子どもが自由に、のびのびと遊べる場ではなくなってきている。

このようななか、地域の公園は、子どもの遊び場としてどのように利用され、公園以外では地域のどのような場所が、子どもたちの遊び場や居場所となっているのであろうか。当研究所ではこのような視点から、小学生以下の子どもがいる母親800名を対

象に、地域の公園環境*1や子どもの外遊びの実態をたずねるためのアンケート調査を行った。本稿ではこのなかから子どもの遊び場としての地域の公園環境や、子どもの外遊びの実態とともに、母親における子どもの遊び場情報や地図・地理情報の活用状況について報告する。なお、地域の公園環境と子どもの自然享受の実態や、地域の住環境評価等に関する調査結果については、本誌「Winter 2010. 1」に掲載予定である。

調査対象者は、小学生以下の子どもをもつ女性800名で、調査概要は図表１の通りである。回答者の平均年齢は37.9歳、就労状況は正社員・正職員が92名（12.4%）、パート・アルバイト、契約・嘱託社員、派遣社員が340名（45.8%）、無職が288名（38.8%）、その他が23名（3.1%）である。居住地は大都市（東京都区部および政令指定都市）が206名（27.7%）、中都市（人口10万人以上の都市）が285名（38.4%）、小都市（人口10万人未満の市または町村）が243名（32.7%）で、９名（1.2%）が無回答であった。

図表1　調査概要

調査名	子どもの遊び、自然体験に関する調査
調査対象	小学生以下の子どもをもつ母親800名（当研究所生活調査モニター）
有効回収数（率）	743名（92.9%）
調査方法	郵送調査
調査時期	2008年11月

2. 調査結果

（1）地域の公園環境と外遊びの頻度

1）地域の公園環境

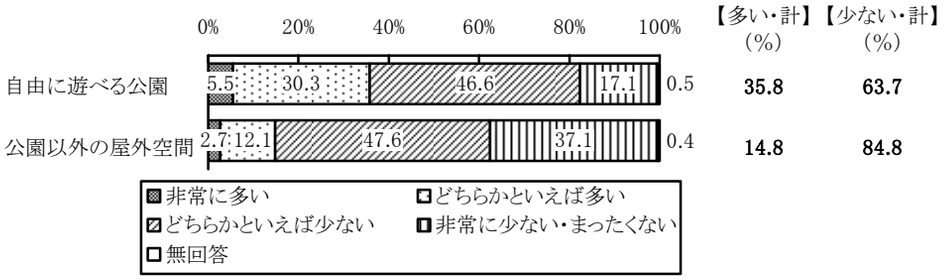
はじめに、子どもの遊び場としての、地域の公園環境についてみる。

今回の調査では「地域」を「歩いていける範囲、小学校区内」とした上で、子どもの遊び場としての公園環境や公園以外の屋外空間の多さについてたずねた。回答の選択肢は、「非常に多い」「どちらかといえば、多い」「どちらかといえば、少ない」「非常に少ない・まったくない」の４つである。

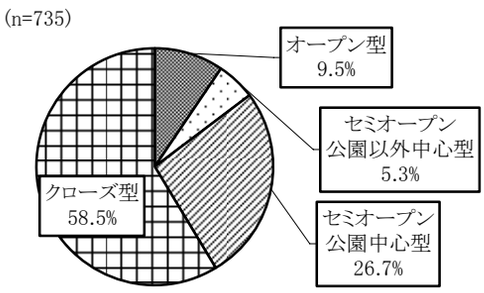
その結果、地域に「子どもが自由に遊べる公園（以下「自由に遊べる公園」）が少ないと感じている（「非常に少ない・まったくない」「どちらかといえば少ない」の合計、以下同）母親は63.7%、「公園以外で子どもが自由に遊べる屋外空間（以下「公園以外の屋外空間」）が少ないと感じている母親は84.8%を占めた（図表２）。

両設問への回答を組み合わせて地域の外遊びの環境をタイプ化してみると、子どもが自由に遊べる公園や公園以外の屋外空間が少ないと答えた「クローズ型」地域に該当する母親が、全体の６割弱を占めた（図表３）。子どもが自由に遊べる公園や公園以外の屋外空間がいずれも多いと答えた「オープン型」地域に住む母親は、全体の１割にも満たなかった。

図表2　子どもの遊び場としての地域の公園環境



図表3「自由に遊べる公園」と「公園以外の屋外空間」の多さからみた地域の公園環境評価



注:「オープン型」
　自由に遊べる公園が多く、公園以外の屋外空間も多い
「セミオープン公園以外中心型」
　自由に遊べる公園は少なく、公園以外の屋外空間が多い
「セミオープン公園中心型」
　自由に遊べる公園が多く、公園以外の屋外空間は少ない
「クローズ型」
　自由に遊べる公園が少なく、公園以外の屋外空間も少ない

2）地域の公園環境と外遊びの頻度

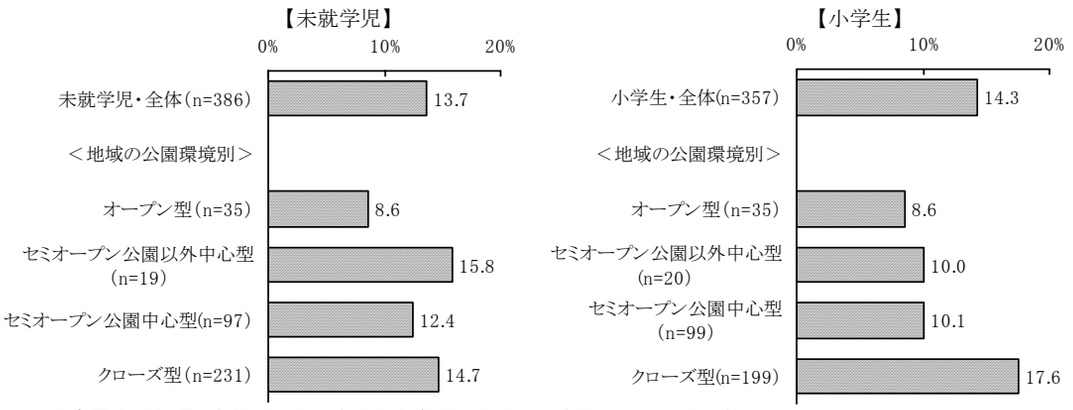
次に、ふだんの生活における、子どもの外遊びの実態をみる。

今回の調査では、子どもが保育園や幼稚園、学校、習い事やクラブ活動等で過ごす以外の時間帯に関する外遊びの状況をたずねた。その結果、子どもがふだん、外で遊ぶ割合（「ほぼ毎日、外で遊ぶ」「ときどき、外で遊ぶ」の合計、以下同）は、平日が65.0%、週末・休日等が77.6%であった（図表省略）。保育施設や学校で過ごす時間が長い平日に比べて、週末・休日等の方が、子どもが外で遊ぶ割合は高い傾向にある。

では、図表３でみた地域の公園環境評価によって、子どもの外遊びの頻度には違いがみられるだろうか。図表４は、子どもがふだん、外で遊ばない割合（平日および週末・休日等のいずれについても子どもが「外ではあまり遊ばない」または「外ではほとんど遊ばない」と答えた母親の割合、以下同）を示したものである。

これをみると、子どもがふだん、外で遊ばない割合は、未就学では13.7%、小学生では14.3%となっている。これを先の地域の公園環境評価別に比較してみると、子どもが外で遊ばない割合は、地域に子どもが自由に遊べる公園が多く、公園以外の屋外空間も多い「オープン型」地域で最も低く、地域に子どもが自由に遊べる公園が少なく、公園以外の屋外空間も少ない「クローズ型」地域で高い傾向にある。「クローズ型」地域に居住する小学生では２割近くが外で遊ばないと答えており、「オープン型」地域の２倍以上の水準となっている。

図表4　子どもがふだん、外で遊ばない割合（地域の公園環境評価別）



注1：保育園や幼稚園、学校等、習い事やクラブ活動等以外の時間帯に関する外遊びの状況
注2：平日および週末・休日等のいずれについても「外ではあまり遊ばない」「外ではほとんど遊ばない」と答えた人の割合

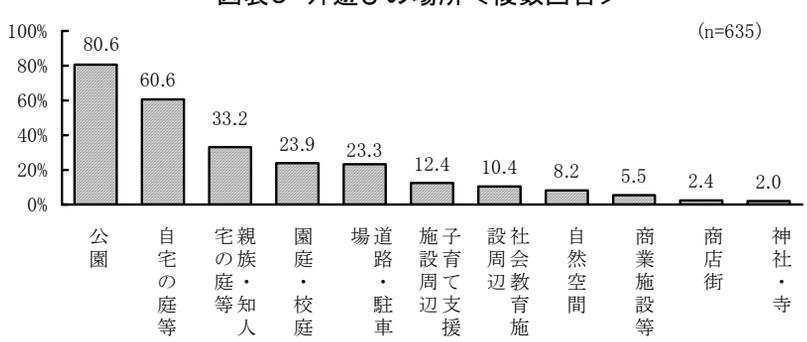
（2）地域の公園環境と外遊びの場所

1）外遊びの場所

次に、子どもがふだん、外で遊ぶと答えた人（平日および週末・休日等のいずれかについて、子どもが「ほぼ毎日、外で遊ぶ」もしくは「ときどき、外で遊ぶ」と答えた人、以下同じ）に関して、子どもが外で遊ぶ際の場所をたずねた結果をみる。

子どもがふだん、外で遊ぶ場所として最も多くあげられたのは「公園」（80.6%）であり、「自宅の庭等」（60.6%）、「親族・知人宅の庭等」（33.2%）がこれに続いた（図表５）。子どもが自由に、のびのび遊べる公園が地域に少ないと感じている人が６割強を占めた一方で、「公園」は子どもがふだん、外で遊ぶ場所として、地域でなお、中心的な位置を占めていることがわかる。また、自宅や親族・知人宅の庭をはじめとする私有空間は、「公園」に次ぐ子どもの遊び場になっている。

図表5　外遊びの場所＜複数回答＞



注1：分析対象は、ふだん子どもが外で遊ぶと答えた人
注2：選択肢の詳細は次の通り

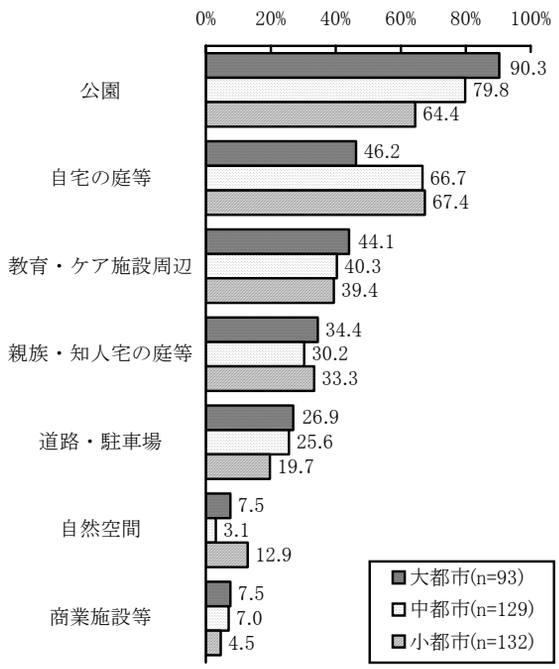
「自宅の庭等」	自宅の庭や、自宅を含む集合住宅の共用スペース
「親族・知人宅の庭等」	親族・友人・知人宅の庭や、親族・友人宅を含む集合住宅の共用スペース
「園庭・校庭」	幼稚園・保育園の園庭、小学校の校庭
「社会教育施設周辺」	公民館・コミュニティセンター・図書館の周辺
「自然空間」	川べり・海辺・池・沼の周辺、雑木林、畑、田んぼ
「商業施設等」	商業施設等の敷地内の屋外空間

2）クローズ型地域における外遊びの場所

次に、先にみた地域の公園環境への評価において、地域に子どもが自由に遊べる公園が少なく、子どもが自由に遊べる公園以外の屋外空間も少ないと答えた「クローズ型」地域の回答者に注目して、外遊びの場所についての詳細をみる。

図表６は「クローズ型」地域に住む母親のうち、子どもが外で遊ぶ場所として「公園」「自宅の庭等」「教育・ケア施設周辺」「親族・知人宅の庭等」「道路・駐車場」「自然空間」「商業施設等」をあげた人の割合を、都市規模別に示したものである。これをみると、「クローズ型」地域に住む子どもの外遊びの場所は、大都市では「公園」（90.3％）をあげる割合が突出して高く、「自宅の庭等」（46.2％）、「教育・ケア施設周辺」（44.1％）がこれに続くのに対し、小都市では「自宅の庭等」（67.4％）をあげる割合が「公園」（64.4％）を上回っているほか、「自然空間」（12.9％）をあげる人が１割強を占める。

図表６「クローズ型」地域における外遊びの場所（都市規模別）＜複数回答＞

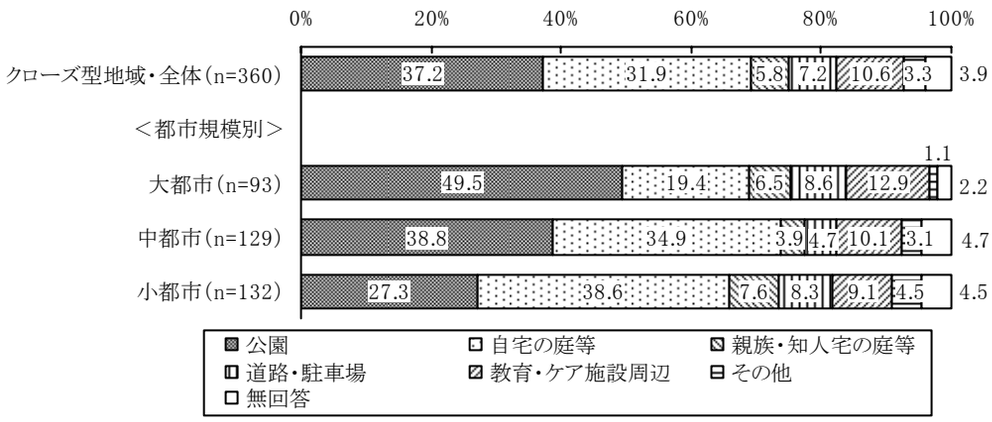


注1：分析対象は、クローズ型地域に居住し、子どもがふだん、外で遊ぶと答えた人
注2：「商店街」「神社・寺」は省略。また、選択肢の詳細は、図表5を参照（「教育・ケア施設周辺」は「園庭・校庭」「子育て支援施設周辺」「社会教育施設周辺」をあげた人の合計）

地域の未利用空間や、自宅の庭等の私有空間が狭いと考えられる大都市では、公園が子どもの外遊びの場としても貴重な空間となっており、外遊びの場が「公園」に集中する傾向が強いと考えられる。また、大都市では「公園」に加えて、「園庭・校庭」「子育て支援施設」などの多様な公共施設やその周辺空間も、子どもたちの外遊びの場として利用される傾向にある。一方、小都市では、「自宅の庭等」の私有空間が遊び場として重要な位置づけを占めており、大都市に比べて外遊びの場が私有空間に集中する傾向がみられる。また、小都市では地域の多様な「自然空間」が子どもの外遊びの場として利用される傾向にある。

実際に、子どもが外で遊ぶ際に、最もよく利用する場所についての回答結果をみると、大都市の「クローズ型」地域では「公園」が最も多く半数近くを占めるのに対し、小都市では「自宅の庭等」が最も多く、４割弱を占めている（図表７）。また、大都市の「クローズ型」地域では、「教育・ケア施設周辺」をあげる人も１割強を占めている。

図表7 「クローズ型」地域に住む子どもが最も多く利用する外遊びの場（都市規模別）



注1：分析対象は、クローズ型地域に居住し、子どもがふだん、外で遊ぶと答えた人
注2：選択肢の詳細は、図表5を参照（「教育・ケア施設周辺」は「園庭・校庭」「子育て支援施設周辺」「社会教育施設周辺」をあげた人の合計、「その他」は「自然空間」「商業施設等」「商店街」「神社・寺」の合計）

（3）遊び場情報と地理情報の活用状況

1）遊び場に関する情報の入手先

次に、地域に子どもが自由に遊べる公園が少なく、子どもが自由に遊べる公園以外の屋外空間も少ないと答えた「クローズ型」地域の回答者に注目し、子どもの遊び場に関する情報の入手先をみた（図表８）。

その結果、情報の入手先として最も多くあげられたのは「親同士の口コミを通じて」（62.6％）であり、「市町村の広報誌を通じて」（53.0％）、「実際に周辺を歩いたり、外出中・移動中にみつけて」（49.1％）がこれに続いた。

都市規模別にみると、大都市では小都市に比べて入手先が多様であり、実際に周辺を歩いたり、外出中・移動中にみつける機会も多い傾向にある。また、母親の年齢別にみると、若い母親ほど親同士の口コミや子育て支援拠点や保育園・幼稚園・学校の先生、インターネットやテレビ・ラジオ、子育てサークル等を通じて情報を得ている人が多い傾向にある。

2）地理情報の活用状況

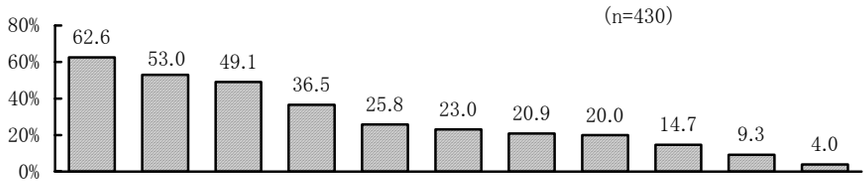
最後に、回答した母親の直近１か月における地理情報の活用実態についてみる。

今回の調査では、紙媒体の「地図」のほか、「パソコン」「携帯電話」「カーナビ」といった情報通信機器を通じた地理情報の利用実態をたずねた。また、利用形態として、「地図そのものをみる」という使い方のほか、パソコン、携帯電話、カーナビに関しては「外出先までの行き方等を調べる」「どのような外出先があるのかを調べる」「現在の位置情報を調べる」といった使い方に関する実態についてたずねた。

その結果、紙媒体の「地図」については年齢が高い母親ほど利用経験が多い一方で、パソコンや携帯電話、カーナビといった情報機器を通じた地図情報の利用経験は年齢

の若い母親ほど多い傾向がみられた（図表９）。また、都市規模別に比較してみると、情報通信機器の種類や、利用形態にかかわらず、おおむね小都市より大都市の方が、利用経験者が多い傾向がみられる。

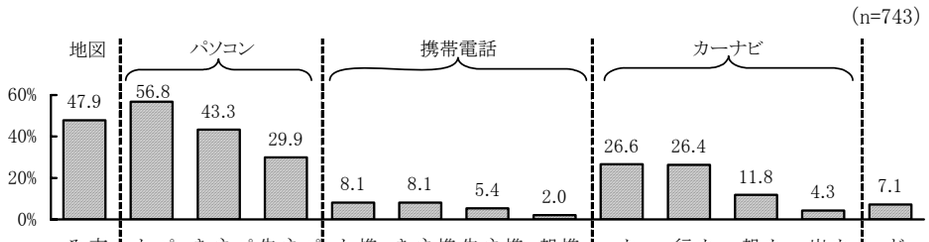
図表８　クローズ型地域に住む母親の遊び場に関する情報の入手先（都市規模別、母親の年齢別）＜複数回答＞



		親同士の口コミを通じて	市町村の広報誌を通じて	実際に周辺を歩いたり、外出中・移動中にみつけて	子どもから聞いたり、子ども自身が見つけて	新聞・雑誌・書籍等を通じて	地元なので、もともと知っている	子育て支援拠点を通じて	保育園・幼稚園・小学校の先生から聞いて	インターネットを通じて	テレビ・ラジオを通じて	子育てサークルを通じて
都市規模別	大都市(n=112)	62.5	51.8	**57.1**	41.1	**32.1**	21.4	18.8	20.5	16.1	13.4	6.3
	中都市(n=155)	60.6	**61.3**	**55.5**	36.1	25.2	17.4	22.6	20.6	15.5	7.7	3.9
	小都市(n=157)	63.7	45.9	36.9	32.5	21.7	**29.9**	21.0	19.7	13.4	8.3	2.5
母親の年齢別	34歳以下(n=111)	**71.2**	46.8	53.2	23.4	**27.0**	**28.8**	**28.8**	21.6	**19.8**	13.5	**10.8**
	35～39歳(n=164)	63.4	57.9	**54.3**	34.1	27.4	18.9	24.4	22.6	16.5	7.9	2.4
	40歳以上(n=155)	55.5	52.3	40.6	**48.4**	23.2	**23.2**	11.6	16.1	9.0	7.7	0.6

注1：分析対象は、クローズ型地域に居住する人
注2：全体より5ポイント以上高いセルは太字表記、5ポイント以上低いセルは下線表記

図表９　直近1か月における地理情報の活用実態（都市規模別、母親の年齢別）＜複数回答＞



		市販の地図や地図書籍をみる	パソコンでインターネット上の地図をみる	ネットで外出先までの行き方等を調べる	パソコンからインターネットで外出先があるのかを調べる	携帯電話でインターネット上の地図をみる	携帯電話から外出先までの行き方等を調べる	携帯電話からインターネットで外出先があるのかを調べる	携帯電話で現在の位置情報を調べる	カーナビで地図をみる	カーナビで外出先までの行き方等を調べる	カーナビで現在の位置情報を調べる	カーナビでどのような外出先があるのかを調べる	どれも経験がない
都市規模別	大都市(n=206)	**53.9**	59.2	46.1	**35.0**	7.3	9.2	5.8	2.4	28.2	27.7	12.1	3.9	2.4
	中都市(n=285)	46.3	58.9	43.9	28.1	10.2	9.8	4.2	1.1	28.1	27.7	12.6	5.3	8.8
	小都市(n=243)	44.4	52.7	40.7	28.4	6.6	5.3	6.6	2.9	23.9	23.9	10.7	3.7	8.6
母親の年齢別	34歳以下(n=181)	43.1	58.0	45.9	32.6	11.6	7.7	6.6	2.8	27.1	**32.6**	10.5	3.9	7.2
	35～39歳(n=285)	44.6	56.5	42.5	33.3	7.7	7.7	6.3	2.1	28.4	28.1	13.7	4.2	7.0
	40歳以上(n=277)	**54.5**	56.3	42.6	24.5	6.1	8.7	3.6	1.4	24.5	20.6	10.8	4.7	7.2

注：全体より5ポイント以上高いセルは太字表記、5ポイント以上低いセルは下線表記

3. まとめ

今回の調査の結果、地域に「子どもが自由に、のびのび遊べる公園」「公園以外で、子どもが自由に遊べる屋外空間」が少ないと答えた母親はそれぞれ63.7%、84.8%を占めた。言うまでもなく、公園には制度上のさまざまな位置づけや社会的な機能があり、必ずしも子どもたちの遊び場としての役割だけが期待されているわけではない。しかしながら、調査結果は、われわれの地域社会を構成するさまざまな空間のうち、公園だけでなく、公園以外の空間からも、子どもが自由に、のびのび遊べるスペースが失われている可能性を示唆している。

こうした状況がある一方で、本調査結果は、地域の「公園」がなお子どもの外遊び場として中心的な位置を占め、そうした傾向がとりわけ大都市において顕著であることを示していた。また、子どもが自由に遊べる公園や公園以外の屋外空間が少ない大都市のクローズ型地域では、園庭や校庭、各種子育て支援施設や社会教育施設の周辺といった多様な公共施設やその周辺空間が遊び場として利用されていた。子どもの遊び場が量的に不足しているような地域では、こうした施設空間を子どもたちの居場所や遊び場として有効に活用することがもっと柔軟に検討されてもよいように思われる。

また、母親が子どもの遊び場に関する情報交換を行っている背景には、地域で子どもが自由に遊べる場所を見つけにくいこととも無縁ではないと思われる。このようななか、とりわけ若い母親にとって、親同士の口コミや保育園・学校・子育て支援拠点等を通じた情報提供は重要な役割を果たしており、インターネット等を通じた地理情報の活用にもさまざまな可能性があると思われる。子どもの教育や学力向上が親や社会にとって重要な課題であることは間違いないが、子どもは遊ぶのが仕事でもある。子どもが自由に、のびのび遊べる場所を地域に確保し、その場所をできるだけ多くの子どもたちが利用できる環境を整えていくこともまた、われわれがもっと真剣に議論すべき大人の「仕事」といえるのではないだろうか。

（研究開発室　副主任研究員）

【注釈】

*1 われわれがふだん目にする「公園」には、各種法制度上の多様な位置づけがあり、広義には「緑地」の一部を構成するものとして定義されている（石川 2001）。しかしながら、一般の生活者がそれらを識別することはきわめて難しいため、本稿およびアンケート調査ではその種類を問わず、広く「公園」と表記した。

【参考文献】

- 石川幹子，2001，『都市と緑地』岩波書店.
- 北村安樹子，2008，「空間からみた子ども政策」『Life Design Report（2008年9-10月号）』.